

真理はあたたかい

釈尊と法華経との体用たいゆう関係について

日高白象

曾って九州地方を托鉢行脚の修行に明け暮れしていた或る冬の日のことでした。たまたま福岡県田川郡金田町の人見という所で牧場を経営されていた本田量久さんという御信者の家に逗留中、九州布教のため東京より西下されて来た井上清純先生と邂逅することが出来ました。

先生は大正の末期より戦前戦後を通し終始一貫、法華経によって現代思想を善導すべく全国的に布教され「如是我聞」等の龐大な著述もされており、法華経教学に対する造詣の深さでは、在家ながら日蓮門下の中でも有名すぎるほどの方でした。この時、私は初対面でした。初めてあった先生は瘦身自髪、六十代の老紳士でした。もと天皇の侍従武官をされたことがあったというだけに、古武士のような厳正な面影をとめていましたが、それにもかゝわらず、肌はすき通るように澄み切っており、眼には深い温い光りをたゞよわせていました。まだ二十代の血気さかんであった私は、このめぐりあいの好機を逸すまじと、日頃疑問にいだいていた教学上のあらゆる問題を、次々に発しては息のつく暇もなく、くい



さがるように尋ねつゞけました。それはもはや質問の域ではなく、むしろ挑戦と
いったような態度であつたかも知れません。先生は内心　とんでもない荒法師に
でつかしたものだ　と苦笑しておられたかも知れませんが、然し応け答えられる
先生の物腰にしても言葉にしても、あくまでも静かであり、あくまでも柔らかい
ものでした。

冬の日射しはガラス戸を通して、縁側を暖かくつゞんでいました。お昼休み、
先生は縁側に坐つてヒナタポッコをされましたが、その中、疲れでも出られたの
か、コックリコックリ心地よい居眠りを始めました。舟をこいでいる謹厳な老
教学者、そのほゝえましい姿に心ひかれて　私も先生にあやかろう　と縁側へ出
た時気配を感じてか、フト眼をさまされた先生が、ニッコリされながら、次のよ
うにつぶやかました。それは

「真理はあたゝかい……」



井上清純先生

というひとことでした。ポツンとつぶやかれたひとことの言葉、それは聞きとれ
ないほど低く細い声だったのですが、蓋し当時の私の心を、これほど強く打った
ものはありませんでした。いなそれは、浩かん難解な仏
教哲理を理論整然と解説する如何なる熱弁にも勝る重み
をもっていた。といつても決して過言ではなかつたでしよ
う。何故ならば、それまでの私は、いや私ばかりでなく
大抵の人々もそうであるように、

真理とは知性上のもの、感情のともなわれない冷いもの

とのみ思い込んで、真理を手がかりとしながら、悟りの境地を求めらるるのにキウキウとしていたからです。学問の仕方が既にそうである以上、修行の仕方もまた同様でした。お題目を唱えるにしても、あたかも高嶺にかゝる実相真如の月を仰ぎながら、お題目を地図とし杖とたのんで、道なき峻嶮を一步一步とよじ登っていたようなものでした。ところがそうした行にせよ学にせよ、追求すればするほど不安や苦惱を増すばかりであつて、遂には一片の安心立命すらも得られないまゝ、中途にして挫折せざるを得なくなつてしまふものです。愛なき真理、愛なき行、それは峻烈以外なものでもありません。悟りの境地は大いなる愛の世界であると標榜しても、愛なき手段によつては愛の目的地に到達されるはずはありません。手段と目的は常に一如していなければならぬからです。

本来、真理は冷たいものでなく、太陽の光が常に明くあたゝかいように、真理もまた常に明くあたゝかいものであつたのです。太陽をはなれて太陽の光はありません。光なき太陽は既に太陽ではありません。太陽を体とし、光を用（働き）とするならば、体と用は一にして二、二にして一、本来不二なるものなのです。それと同様に、仏陀をはなれて真理はなく、真理をはなれて仏陀はありません。いや仏陀が真理そのものであり、真理そのものが仏陀のすべて（慈悲・命）でもあつたのです。

曾つて仏陀は、諸行無常・諸法無我・寂靜涅槃という三法印をはじめとして

四諦・八正道・十二因縁・六波羅密、等々の無量の真理を説き示されました。然し諸行無常というその一句にしても、単なる真理の一片ではなく、実に仏陀の全人格を悉く投入したものであったのです。法華経では諸法実相・一念三千の法門が展開されていますが、このことにしても仏陀の人格・仏陀の慈悲というものを抜きにしては到底その実を得ることは出来ないでありましょう。げに「一々文々是真仏」、経文の一字一字は悉く仏陀が、その全生命を吐露された全句であったのです。お題目にしても、その通りです。日蓮大聖人が観心本尊鈔の中で、「釈尊の因行・果徳」の二法は、妙法蓮華経の五字に具足す」と喝破され、また四信五品鈔の中でも、「妙法蓮華経の五字は、経文に非ず、その義に非ず、たゞ一部のこゝろのみ」と道破されている通り、お題目は単なるお経の文字ではなく、またその教理を示そうとしたものでなく、たゞ全く法華経一都（八巻二十八品）の肝心である本門の八品（特に如来寿量品）に顕現された本仏釈尊のその久遠の因行と果徳、即ち久遠の命そのものであり久遠の祈りそのものにほかならなかつたのです。水南禅師は、その偈に

* 悟りという「果」を得るための「因」としての修行。数多くの前世の菩薩時代の修行を含む。

* 修行の結果得た佛の能力・特性。衆生を救う力・慈悲など。

「体に即する用を知といふ用に即する体を寂となす。灯に即するとき灯が光で、光に即するとき光が灯であるようなものだ。灯を体となし、光を用となして分けではみるが、これは二つでなくて而も二つなのだ」と説かれています。まことに体即用、用即体、用をはなれて別に体があるのでなく、またその体が用の主となつていゝるのでもないのです。もとより本仏釈尊をはなれてお題目があるのでもなく、お題目をはなれて本仏釈尊もありうるものではありませんが、こゝで注意しなければならぬことは、本仏釈尊の奥に、釈尊を釈尊たらしめている主なるお題目があるのではなく、またお題目の奥に、お題目をお題目たらしめている主なる本仏釈尊があるのではないということです。釈尊とお題目との体用關係について日蓮大聖人は、しばしば母親とその母乳のたとえをもつて説明されています。まことに解りやすい適切なたとえなのですが然し往々にして母親を体とし母乳を用と見なしても、母乳の奥に母親を見、母親がいなければ母乳はありえないという考えに墮ち入ったり、甚しきにいたつては母乳が体で母親が用ということが絶対にありえない、母乳房は母親の一部であり、母親あつての母乳ではないか、という考えに墮ち入りがちであります。

これは一見、もつともらしく思われますが、然しお乳を求めて火がついたように泣き叫ぶ我が子に、お乳を与えない母親が何処におります。若し母親の乳房からお乳が出なければ、母親は赤児のために、代るべきお乳を求めて、気でも狂つたかのように採し廻るはず。こゝではもはやお乳こそ主であり、母親は

用となつてゐるではありませんか。女体と母乳といへば、たゞその限りでは母乳は女体の一部分より排出されるにすぎないものかも知れませんが、乳のみ児に對した時、母親と母乳は、互に体用不二となつてゐるのです。事實、乳のみ児にとつては母親はそのまゝ母乳であり、母乳はそのまゝ母親でしかないのです。

日蓮大聖人は、このたとえから末法は一切衆生を、しばしば「末代の幼稚」と申されましたが、法華經を信ずる者は、あたかも幼児が母親を母乳と思ひ、母乳を母親と思うように、本仏釈尊それ自体にお題目そのものを見、お題目のそれ自体に本仏釈尊そのものを仰ぐのです。いやそういう信仰の人こそ、まことの法華經の行者と申せましよう。

曾つて、仏陀の説かれたひとことの教え、一片の真理にも仏陀の限りなき慈愛がこもり、仏陀のいのちが脈うつてゐるものでした。

「真理はあたゝかい」

「真理は生きてゐる」

この感動は、仏陀と真理を体用不二の關係に見ることの出来る者にこそ、はじめて与えられるものなのです。またこの見地に立つならば、まして法華經は仏陀が久遠の本仏として、その骨髓の全生命を、叡智も慈悲も、力用も功德も、悉く顕発し尽して封じこめたものであるだけに、法華經をたもつことが、そのまゝ本仏の命をたもつことゝなり、お題目を唱うれば、本仏の温き血潮がお題目として我が全身に横溢し、

「法華経はあたゝかい」

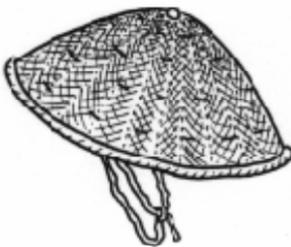
「法華経は生きてゐる」

という感動が、実感的に肌にも感ぜられて来るのです。そこにはもはや本仏と自分自身との間におかれていた遙かなる距離もなく、唱題の当所が、そのまゝ靈山淨土の仏界となつており、過去、現在、未來の三世を通して、生きとし生けるすべてのものに、在りとしあらゆるすべてのものに、一木一草、一礫りやく一塵じんにまでも、限りなき価値が見出されて来るのです。まことに法華経こそ、久遠なる仏陀の一切衆生に対する「大いなる愛の調べ」。お題目こそ「大いなる愛の祈り」なのです。私たちがこの大いなる調べに乗つて法華経を讀誦し、この大いなる祈りに乗つてお題目を唱える時、はかなき人間愛は、我にもあらず、何時の間にか、限りなき仏陀の愛に包摂昇華されているばかりでなく、その当所に宇宙的大ハートモノの世界が現成しており、太陽も月も星も、そして流るゝ雲、こち吹く風までも、天地のすべてのものが、私たちと共に同じ「愛の調べ」をかなでており、同じ「愛の祈り」を捧げているという雄大なる仏界の事実を認識することが出来るのです。そこには老若男女、貧富貴賤の相違もなく、業の深重じんじゆう、罪の輕重けいちゆうすらあるはずはありません。すべては仏子であり、三界はみな仏国なのです。

かえりみれば初めて井上先生の警咳に接してより、およそ二十年の歲月が流れていますが、昭和四十三年一月五日、先生の第七回忌を迎えるに当り、

この二十年の歲月こそ「真理はあたゝかい」という先生のこの一句の修証*
にあつたのではなかつたか、という思い禁じ難く、謹んでこの小稿を先生の
靈前に捧げるものです。

『鷲峰』昭和四十三年正月号より



* 悟り（証）を修行によって証明すること。